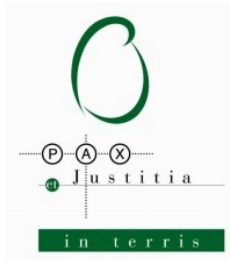


CATHOLIC DIOCESE OF NAGOYA
2-6-35 AOI HIGASHI-KU
NAGOYA, 461-0004 JAPAN
TEL :81-52-935-2223
FAX :81-52-935-2254
EMAIL:curia@nagoya.catholic.jp



カトリック名古屋教区
461-0004 名古屋市東区葵 2-6-35
電話 :052-935-2223
ファックス:052-935-2254
Eメール:curia@nagoya.catholic.jp

教区の皆さま

2021年11月4日

教区司教 松浦悟郎

名古屋教区聖年 神からの賜物 (A GIFT) を感謝し、新しい時代へ

A (愛知) G (岐阜) I (石川) F (福井) T (富山)

＋主の平和

来年、2022年2月18日に名古屋教区は設立100周年を迎えます¹。10月3日の教区宣教司牧評議会において、2022年2月より一年間を「名古屋教区聖年」とすることが決定されました。具体的には、下記の要領で実施していくことになります。この100年間の歩みを主が導いてくださったことを感謝し、喜びのうちにさらなる一步を共に踏み出していきたいと思います。

記

- 2022年2月13日(日)に教区として100周年記念ミサを行い、それ以後の一年間を「教区聖年」とする。聖年の締めくくりのミサ(2023年聖霊降臨の主日)には一年間の取り組みを報告し合い、新しい歩みを確認する。「聖年」では以下の活動をする。
 - 名古屋教区100年の宣教の歩みを学ぶ。
 - 巡礼する(祈る)
歴史区分(あるいは、ジャンル)に従って主な巡礼地を定め、公的、私的に巡礼する。
 - 名古屋教区宣教司牧指針(2015年「司教教書」)を中心に現代の「時のしるし」を読み、キリストから託された教区の新しい時代の使命を考える。
- 100周年の歩みの学びのために、時代を下記のように名古屋教区の礎となった「前史」と100周年を「第一期」と「第二期」に分ける。
前史(ザビエル以降、明治再宣教から1922年までのキリスト教)
明治の再宣教時代(名古屋教区における宣教会、修道会の働きと教区の現状)
名古屋教区の100年間
第一期 (40年間)1922年～1962年
名古屋使徒座知牧区設立から1945年の終戦を経て第二バチカン公会議まで
第二期 (60年間)1962年～2022年
第二バチカン公会議からNICE(福音宣教推進全国会議)を経て現在まで

以上

¹ 1922年2月18日名古屋使徒座知牧区設立。東京教区より分離。J. ライネルス師(神言会)が知牧区臨時管理者に、1925年には知牧区長に任命。パリ外国宣教会は名古屋から全員引き上げる。1941年名古屋使徒座知牧区管理者に松岡孫四郎師が任命され(新潟使徒座知牧区管理者を兼任)、1945年より知牧区長となる。1962年4月16日に司教区になり、同年6月26日司教叙階。

教区聖年に取り組むために

1. 聖年について

聖年の起源は、旧約聖書にあり(レビ記 25:1~55)、イスラエルの民は 7 年ごとに土地を休ませる安息年が 7 回巡った翌年、すなわち 50 年目にあたる年をヨベルの年として祝っていました。ヨベルとはヘブライ語で「雄羊の角笛」で(ヨシュア記 6:4)、ラテン語の jubilum(喜びの叫び)と結びついて「良き知らせを告げる角笛」を意味するようになりました。その「良き知らせ」の内容は、土地の安息、負債の免除、奴隷の解放などです。

ヨベルの年は「安息日」と深く結びついていますが、その起源は創世記の創造物語で神が 7 日目に休まれたことにあります。「十戒」を記した出エジプト記 20 章には次のように書かれています。

「安息日を心にとめ、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。」(出 20:8~11)

神の前に誰もが平等であったはずでしたが、やがて民の中に不平等、差別、貧富の差が生じていきました。こうした現実の中で十戒は、「聖なる七の数字を持ち出して、七がつく日、つまり七日目ごとに聖なる時がきたならば、そのときこそ、すべての人が平等であるということを思い出してください」と語っているのです。(太田道子『新しい創造』P39)すなわち、「壊れた世界の中に、平等を持ち込むための仕組み」、「平等回復のためのプログラム」(同著 P40)が安息日の本来の意味だということです。今の主日の意味もここにつながっています。

2. 名古屋教区における「聖年」

上記の意味を踏まえて、名古屋教区では教区聖年を、「この現代世界の現実を神が本来望まれ創造した本来のあり方へと回復していく時」という大きな視野の中で受けとめたいと思います。その中で、私たちは教区として、またキリストに従う信仰者として、今、この地で託された使命とは何かを祈り求めています。そのために歴史を学びます。

＜歴史が私たちに問いかけること＞

100 年の前史とそれに続く第一期の前半は、まさに迫害による苦難の歴史でした。それらの迫害はなぜ起こったのでしょうか。何が社会の考え方と信仰とがぶつかったのでしょうか。その中で、信仰者と教会は何を妥協してしまい、また何をゆずらなかつたのでしょうか。

第一期の後半から第二期にかけて、戦後の日本は目覚ましい経済発展をとげ、安定した社会となっていきました。この高度成長時代、私たちの信仰生活では何を得て、何を失ったのでしょうか。私たちの信仰や教会の宣教の熱意はどうなっていったのでしょうか。

信教の自由が与えられた戦後、日本の教会は小教区のみならず、学校やさまざまな施設も含めて宣教会、修道会の助け(他国からの援助)を得ながら大いに発展していきました。それが今の名古屋教区の礎にもなっています。しかし、もし、意識のどこかで「教会は誰かがつくってくれるし、誰かが宣教してくれる」という依存体質が残っているとしたら、教会は次第に弱っていくことでしょう。

一方、戦後の世界では大きな問題(南北問題、東西問題)に激しく揺れ動いていました。しかし、こうした現実には教会は閉じていました。人々の上に起こっている現実とかけ離れていることを自覚した教会は、世界では第二バチカン公会議、日本では福音宣教推進全国会議(NICE)など、さまざまな刷新を行っていきました。今、その刷新の果りはどこにあるのでしょうか。また、今、劇的に変化しつつある社会の中での教会の役割は何でしょうか。

このように、私たちは 100 周年という歴史からの問いかけを受けとめ、また、祈りや巡礼を通して、これまでも、これからも共に歩んでくださるキリストの心に触れ、新しい時代に向けて福音を告げる熱意と力を求めていきたいと思えます。